

宮祭 小阪・梶吉神社(2009年10月1日)

今回の記事は10月1日に小阪、梶吉(すぎよし)神社にて開催された宮祭の様子です。

朝8時から祭の事前準備があるということで、梶吉神社に向かう。

当然のようにすでに準備が始まっている。色川では集合時間の30分前(早い人で1時間前!!)には集合しているのがスタンダードなのだ。

ヨソ者の私が参加してもいいのだろうか、直前まで不安で一杯になりながら準備をしている皆さんの中に入っていき私だったが、
「岩崎君、そっちもっててくれるかい？」と笑顔で声をかけてくれた地元のおっちゃんの声にホッと一安心。



お祭には欠かせない「旗」。

これがかなり立派なもので、一人で持ち上げられないこともないが、ちょっと大変。数人で協力しながら準備をする。

「ああやったかなあ？」「いやこうやないか？」

「おじさ～ん！これでいいかいねえ？」と相談しながら会場を作っていく。

そうやってみんなで作っている雰囲気、どこことなく心地よくて、うれしい。



こういう時に活躍するのが、むらのお年寄りだ。

昔からやっているからか作業工程が体に染み付いていて、動きがかなりてきぱきしている。そして、そんなお年寄りを助ける、むらの中堅の方々。こういう伝統行事を支えているのは、こうした助け合いや、教え合いなんだろうなと感じる。





準備が終わり、だんだん地域の人があつまり、いよいよ祭の雰囲気が出てくる。

普段は作業着で、田畑や山で活躍しているむらのおっちゃん、おばちゃんも今日は正装で登場。いつもと違う雰囲気がなんだかかっこいい。

以前、小阪の昔話を教えてくれたおっちゃんに、かつての宮祭がどんな雰囲気だったのかを聞いてみた。「昔まだ銅山が栄えていたころは、お宮の前の道にずらーっと出店も出てたんよ。」

今でこそ、人口が少ない小阪だが、かつては銅山で栄え、人口も多かった。そのころは、若者も多く、神社の中には土俵があり、お祭のたびに相撲をとっていたそうだ。祭で相撲とは、当時の祭はどんな雰囲気だったのだろうか。ワイワイと応援する運動会みたいだったのだろうか。今は高齢化が進んでいる小阪だが、若者が増えたら一体どんな風になるのだろうか。想像するとかなりワクワクしてしまう。

方々で雑談をしている人々も、祭の時間が近づくにつれて少しずつソワソワとした雰囲気に変わり、宮総代の掛け声でいよいよお祭が始まる。

宮祭自体は小阪独特の行事というわけではない。今日まで色々な地区の祭にお邪魔させていただいているが、色川地区内だけでも、祭の準備、本番、打ち上げ(後の祭り)の雰囲気が違うように感じる。

このことが、色川内にある9つの集落が、かつて別々のむらであったのだということを私に思い起こさせてくれる。ⁱⁱ

御祓い、祝詞、お供えと、荘厳けどもどこか和やかなムードで祭は着々と進み、お神酒を配って終了。みんなの表情もどこかほっとしたように感じる。何人かで神主さんをお見送りし、みんなで打ち上げの準備をする。





打ち上げにはお寿司や刺身とかなり豪華！！

「小阪には金持ちはおらんけど、こんな時ぐらいは奮発するんや。」とおっちゃん。

宮祭は都会にあるような祭の雰囲気とは違い、正月やお盆で田舎に帰ったときの様な、アットホームさを感じる。お互いをよく知っているもの同士が、酒を酌み交わし、最近の事から、昔の話までいろいろな話題で盛り上がっている。

終始ワイワイとしたムードの中、ここが限界集落と呼ばれていることに違和感があった。

「小阪はな、若いもんが頑張ってくれているもんで、こんだけ元気なんや」と誇らしげに語るじいちゃん。そう語ったじいちゃんは、年齢的には確かにじいちゃんだが、じいちゃんには見えない。ちなみに、じいちゃんが言った「若いもん」とは 50 代後半の人たちのことである。

こんな形でむらの年寄りが、むらの中堅や若者を信頼して、任せられる関係にあるということが、小阪のすごさであり、誇りなのではないだろうか。そんなことを感じる一日だった。



ⁱ 神社の行事などを取り仕切る人。むらでは色々な役割がある。

ⁱⁱ 色川はかつて独立した 10 ヶ村で、後に合併した。現在、一つの集落(高野)は廃村となり、現在は 9 つの地区からなる。